

平成29年度全国高等学校教育改革研究協議会
高大接続改革及び
高等学校学習指導要領の改訂
の方向性について

20171024 大谷大学文学部
荒瀬克己

1

Gordian Knot

ゴルディアスの結び目
ゴルディオンの結び目

マケドニア王

アレクサンドロス3世(紀元前356~323年)

アジア遠征でゴルディオン(現在のトルコの首都アンカラの近くの町)に立ち寄ったときの逸話。

Gordian Knot

ゼウス神殿に、一台の戦車が飾られていた。この戦車を馬につなげる柄の部分にはロープが複雑に縛り付けられており、「この結び目を解くものはアジアの王者となる」と言われていた。

SDGs Sustainable Development Goals
エスディーゼーズ 持続可能な開発目標
地球環境と人々の暮らしを持続的なものとするために、すべての国連加盟国が2030年までに取り組む17分野の目標。

貧困、飢餓、エネルギー、気象変動の対策……質の高い教育、安全な水とトイレ、働きがいと経済成長というような目標

朝日新聞2017年4月17日

世界では、1日1ドル25セント未満で生活している人が約7億500万人。初等教育就学年齢の9パーセントにあたる約5900万人が学校に通えていない。

約110万人の子どもが人身売買の末に強制労働を強いられている。

日本では、男女間の賃金格差が
OECD加盟国中3番目に大きい。
債務残高は、GDP比232.4%。
平均月収8.4万円の大学生が
毎月19.5万円の借金。

食品ロスは、環境省によれば、
621万トン。食品廃棄物2775万トン(2014年)
「3010運動」 国連食糧農業機関(FAO)の
報告書(2015年)によれば、1日に4万人が餓死

2

高大接続システム改革会議「最終報告」 2016. 3. 31

- I 検討の背景と狙い
- II 高大接続システム改革の基本的な内容
 - (1) 高大接続システム改革の基本的な内容
 - ア 高等学校教育改革
 - イ 大学教育改革
 - ウ 大学入学者選抜改革
 - (2) 段階を踏まえた着実な実施
- III 高大接続システム改革の実現のための具体的方策
 - 1. 高等学校教育改革 <項目略(すべて)>
 - 2. 大学教育改革
 - 3. 大学入学者選抜改革
- IV 改革の実現に向けた今後の検討体制等
<項目略(すべて)>

高大接続システム改革会議最終報告2016. 3. 31

「I 検討の背景と狙い」から

○ このような大きな社会変動の中では、これからの我が国や世界でどのような産業構造が形成され、どのような社会が実現されていくか、**誰も予見できない**。確実に言えるのは、先行きの不透明な時代であるからこそ、多様な人々と協力しながら主体性を持って人生を切り開いていく力が重要になるということである。また、知識の量だけでなく、**混とんとした状況の中に問題を発見し、答えを生み出し、新たな価値を創造していくための資質や能力が重要になる**ということである。

■大学教育改革

「大学教育の質的転換」
どんな力を身に付けたか

「卒業認定・学位授与の方針」(ディプロマ・ポリシー)、「教育課程編成・実施の方針」(カリキュラム・ポリシー)及び「入学者受入れの方針」(アドミッション・ポリシー)の策定及び運用に関するガイドライン

2016(平成28)年3月31日

中央教育審議会大学分科会大学教育部会

はじめに～本ガイドラインの位置付け～

○ 先行きの予測が困難な複雑で変化の激しい現在の社会において、個人の充実した人生と社会の持続的発展を実現するためには、一人一人がこれまで以上に自らの能力を磨き、**高めていくことが不可欠**である。そのための鍵として特に重要なのは大学教育である。大学には、学術研究を通じて新たな知を創造するとともに、自らの教育理念に基づく充実した教育活動を展開することにより、生涯学び続け、主体的に考える力を持ち、未来を切り拓いていく人材を育成することが求められる。

○ このような大学教育への質的転換を図るため、各大学において
「卒業認定・学位授与の方針」(以下「ディプロマ・ポリシー」という)、
「教育課程編成・実施の方針」(以下「カリキュラム・ポリシー」という)
「入学者受入れの方針」(以下「アドミッション・ポリシー」という)
 の三つのポリシーを策定することの重要性については、これまでも中央教育審議会における累次の答申等において指摘されてきた。

○ このことを踏まえ、各大学においても積極的な取組がなされ、近年多くの大学で三つのポリシーが策定されるようになっているが、
その内容については、抽象的で形式的な記述にとどまるもの、相互の関連性が意識されていないものも多いことなどが指摘されている。

○ 他方、高等学校においては平成25年度入学者から現行学習指導要領が順次適用され、平成28年度には、その下で教育を受けた学生が大学へ入学することになる。現行学習指導要領では、**知識・技能の習得に加えて、思考力・判断力・表現力等の能力や、主体的に学習に取り組む態度の育成が目指されている。**さらに、次期学習指導要領の策定に向けて、**高等学校を含む初等中等教育について「アクティブ・ラーニング」の視点からの学習・指導方法の改善に関する議論が行われている。**

大学教育の一層の改革

○ 各大学の教育理念にふさわしい入学者を受け入れるための**大学入学者選抜の在り方**をより適切なものに改善すること
 ○ 単なる授業改善にとどまらず、大学として**体系的で組織的な教育活動**を展開することや学生の**能動的・主体的な学修を促す取組**を充実すること
 ○ 学修成果の可視化やPDCAサイクルによる**カリキュラム・マネジメントの確立等**に取り組むこと
 ……が特に急務

3つのポリシー 2017年4月1日実施

○ 認証評価 ○ 補助金

<学位授与機構 国立大学評価>

入学者選抜の在り方

■ 大学入学共通テスト

3年生 平成32(2020)⇒平成36(2024)

<試行調査(プレテスト)>

記述式・英語4技能、選択式の改善
 入試の問題か 教育の問題か

幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)
 (中教審第197号)

平成28年12月21日
 中央教育審議会

はじめに

第1部 学習指導要領等改訂の基本的な方向性

第1章 これまでの学習指導要領等改訂の経緯と
子供たちの現状

第2章 2030年の社会と子供たちの未来

第3章 「生きる力」の理念の具体化と教育課程の課題

第4章 学習指導要領等の枠組みの改善と「社会に開
かれた教育課程」

「カリキュラム・マネジメント」の実現

「主体的・対話的で深い学び」の実現（「アクティブ・
ラーニング」の視点）

第5章 何ができるようになるか —資質・能力—

第6章 何を学ぶか —教科等を学ぶ意義と、教科等
間・学校段階間のつながり—教育課程の編成

第7章 どのように学ぶか —各教科等の指導計画の
作成と実施、学習・指導の改善・充実—

第8章 子供一人一人の発達をどのように支援するか
—子供の発達を踏まえた指導—

1. 学習活動や学校生活の基盤となる学級経営の充実
2. 学習指導と生徒指導 3. キャリア教育（進路指導を
含む） 4. 個に応じた指導 5. 教育課程全体を通じた
インクルーシブ教育システムの構築を目指す特別支援
教育 6. 子供の日本語の能力に応じた支援の充実

第9章 何が身に付いたか —学習評価の充実—

1. 学習評価の意義等

2. 評価の三つの観点

3. 評価に当たっての留意点等

第10章 実施するために何が必要か —学習指導
要領等の理念を実現するために必要な方策—

1. 「次世代の学校・地域」創生プランとの連携

2. 学習指導要領等の実施に必要な諸条件の整備

3. 社会との連携・協働を通じた学習指導要領等の
実施

(~p.71)

**第2部 各学校段階、各教科等における改訂の具体的な
方向性**

第1章 各学校段階の教育課程の基本的な枠組みと、学校
段階間の接続

1. 幼児教育 2. 小学校 3. 中学校 4. 高等学校
5. 特別支援学校 6. 学校段階間の接続

第2章 各教科・科目等の内容の見直し

1. 国語 2. 社会、地理歴史、公民 3. 算数、数学
4. 理科 5. 高等学校の数学・理科にわたる探究的科目
6. 生活 7. 音楽、芸術（音楽） 8. 図画工作、美術、芸術
（美術、工芸） 9. 芸術（書道） 10. 家庭、技術・家庭
11. 体育、保健体育 12. 外国語 13. 情報 14. 主とし
て専門学科において開設される各教科・科目 15. 道徳教
育 16. 特別活動 17. 総合的な学習の時間 (~p. 236)

＜中教審答申＞から 2016年12月21日

人工知能がいかに進化しようとも、それが行ってい
るのは与えられた目的の中での処理である。一方で
人間は、感性を豊かに働かせながら、どのような未
来を創っていくのか、どのように社会や人生をよりよ
いものにしていくのかという目的を自ら考え出すこと
ができる。多様な文脈が複雑に入り交じった環境の
中でも、場面や状況を理解して自ら目的を設定し、
その目的に応じて必要な情報を見だし、情報を基
に深く理解して自分の考えをまとめたり、相手にふさ
わしい表現を工夫したり、答えのない課題に対して、
多様な他者と協働しながら目的に応じた納得解を見
いだしたりすることができるという強みを持っている。

このために必要な力を成長の中で育てているのが、
人間の学習である。解き方があらかじめ定まった問題
を効率的に解いたり、定められた手続を効率的にこな
したりすることにとどまらず、直面する様々な変化を柔
軟に受け止め、感性を豊かに働かせながら、どのよう
な未来を創っていくのか、どのように社会や人生をより
よいものにしていくのかを考え、主体的に学び続けて
自ら能力を引き出し、自分なりに試行錯誤したり、多様
な他者と協働したりして、新たな価値を生み出していく
ために必要な力を身に付け、子供たち一人一人が、予
測できない変化に受け身で対処するのではなく、主体
的に向き合って関わり合い、その過程を通して、自ら
の可能性を發揮し、よりよい社会と幸福な人生の創り
手となっていけるようにすることが重要である。

高大連携教育フォーラム
いま育成すべき力は何かを
ともに考える
～高等学校・大学の役割～
12月9日(土)
キャンパスプラザ京都
大学コンソーシアム京都

第15回高大連携教育フォーラム
いま育成すべき力は何かをともに考える
～高等学校・大学の役割～

日 時 ▶ 2017年12月9日(土) 9:30～17:15 (受付9:00より)
 会 場 ▶ キャンパスプラザ京都
 参加費 ▶ 京都府内の高等学校・大学関係者：1,000円
 上記以外の方(京都府内企業関係者含む)：2,000円
※「レジューム・資料集」「報告集」を含みます。

現在、「高大接続システム改革」の具体化に向けた検討が進められている。しかし、その注目は、依然として、大学入学者選抜改革、特に「大学入学共通テスト」に集まっている。「高大接続システム改革」の本来的な目的は、高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜を一体的に改革することにより、次代を生かせる高校生・大学生に必要な資質・能力を身に付けさせることであって、大学入学者選抜改革は「教育改革」を実現するための改革の一つであるということをお忘れはならない。
 高等学校・大学が大学入学者選抜も含めた教育改革を進めていくにあたっては、双方が「若者にどういった力を身に付けさせるべきなのか」ということを基礎として持つ必要があるということである。
 その視点を立ち、本フォーラムでは、生徒・学生の学びに見られる課題を探り、共有しながら、高等学校・大学が養うべき能力はどういうものであるのかについて、ともに考えていきたい。

第1部 基調講演、事例報告、パネル・フロアディスカッション
 定員200名 9:30～15:00 (昼休み12:30～13:30)

総合司会 大西 俊弘 氏 (龍谷大学理工学部准教授 / 大学コンソーシアム京都高大連携推進室)
 開会挨拶 北村 聡 氏 (京都外大西高等学校校長 / 京都高大連携研究協議会運営委員長)
 趣旨説明 荒瀬 克己 氏 (大谷大学文学部教授 / 大学コンソーシアム京都高大連携推進室長)

基調講演 / 9:35～10:35
高大接続改革の政策的方向と課題 —「学びのリレー」の確立に向けて—
 講師 合田 哲雄 氏 (内閣府 人生100年時代構想推進室 内閣参事官 / 前文部科学省初等中等教育局教育課程課長)

事例報告 / 10:45～12:30
 ▶事例報告① 京都光華女子大学
私立大学における要支援学生への学習支援の取り組みと今後の課題 —アクティブラーナーの醸成—
 講師 岐島 輝美 氏 (京都光華女子大学健康科学部看護学科講師)

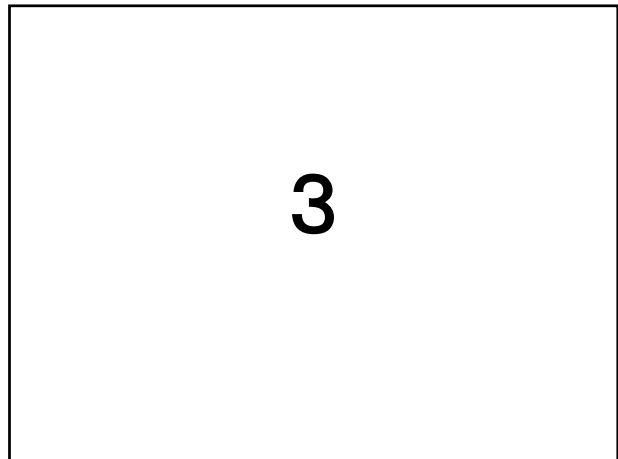
▶事例報告② 追手門学院大学
学びと成長を保証する「学ぶ力」—教育課程設計の理論と実践からの捉え直し—
 講師 池田 輝政 氏 (追手門学院大学健康科学部看護学科准教授)

パネル・フロアディスカッション / 13:30～15:00
 「いま育成すべき力は何か」について、フロアの参加者との意見交換も含めて考えていく
 パネラー 合田 哲雄 氏・岐島 輝美 氏・池田 輝政 氏 コーディネーター 筒井 洋一 氏 (元京都府立大学文学部教授)

第2部 分科会 (6分科会) / 15:15～17:15 ※第2部の詳細は、裏面をご覧ください

第1分科会【表現技法】 / 第2分科会【数学】 / 第3分科会【英語】 / 第4分科会【理科】
 特別分科会①【アドミッション専門人材の育成】 / 特別分科会②【高大社連携キャリア教育】

情報交換会 17:30～18:30
 キャンパスプラザ京都2Fホールにて開催いたします。お時間の許す限りご参加ください。参加費3,000円 / 定員60名



■新学習指導要領での教育活動
 小学校 平成32(2020)
 中学校 平成33(2021)
 高校 平成34(2022) 年次進行

■高校生のための学びの基礎診断
 2年生 平成31(2019)⇒平成35(2023)
 PDCAサイクルを回すため
 カリキュラム・マネジメントのため

中学校学習指導要領(2017年3月)前文
 これからの学校には、こうした教育の目的及び目標の達成を目指しつつ、一人一人の生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる。このために必要な教育の在り方を具体化するのが、各学校において教育の内容等を組織的かつ計画的に組み立てた**教育課程**である。

- 一人一人の生徒が、自分のよさや可能性を認識する
 - あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越える
 - 豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにする
- 各学校において教育の内容等を組織的かつ計画的に組み立てた**教育課程**

第1章総則 第1 中学校教育の基本と教育課程の役割
4 各学校においては、生徒や学校、地域の実態を適切に把握し、教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立てていくこと、教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと、教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくことなどを通して、教育課程に基づき組織的かつ計画的に各学校の教育活動の質の向上を図っていくこと(以下「**カリキュラム・マネジメント**」という。)に努めるものとする。

- 生徒や学校、地域の実態を適切に把握
- 教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立てていく
 - 教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていく
 - 教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保・改善を図っていく
- 教育課程に基づき組織的かつ計画的に各学校の教育活動の質の向上を図っていくこと……**カリキュラム・マネジメント**

目標－現状＝課題

課題にどう取り組むか。
ただし、現状は変容する。
よって、目標は見直される。
当然、課題も変更される。
何から始めるか？

現状を把握し、
目標を設定、共有し、
仮説を立て、段取りを組む。
振り返りつつ取り組む。

教育課程、学力、キャリア教育、
「主体的、対話的で深い学び
(アクティブ・ラーニング)」、
評価、学校などの定義の共有が必要

4

自ら問う力 育む 読売新聞2017. 2. 2**やってみよう！ 新聞でハテナソ**

ハテナソ：疑問を表す「はてな」と「マラソン」を組み合わせた佐藤賢一京都産業大教授の造語。2020年度から始まる次期学習指導要領の柱「アクティブ・ラーニング(自ら問い、学ぶ)」を実現する新たな教育手法として注目されている。米国の住民運動の指導者、ダン・ロスステイン氏著の「たった一つを変えるだけ」(新評論社刊)を参考に。ロスステイン氏は、貧困層の大人が、必要な情報と社会的支援を得られるような問いを発する力を身につけるために開発した。(ルース・サンタナとの共著)

中学校教員……「疑問を持っていても解消の仕方がわからず、質問せずにそのままにしてしまう子どもたちが多。子どもに質問の技術を伝えることで、アクティブ・ラーニングを推進していきたい」

大学の授業「質問出ない」

ある国立大工学部長「学生が質問しやすいよう授業を工夫しているのになぜなのか」

学問はその字のごとく「**問うて学ぶ**」。質問なくして学問は成り立たない。

酒井邦嘉 東京大教授(言語脳科学)「書かなくなっている」「授業中、ノートもとらない」。パソコンに打ち込んだり、板書をスマートフォンで撮影したりするのだという。「**書く**」行為は、単に「**パソコンに打ち込む**」より、記憶させ、あるいは疑問を起こさせる点で優れていることは、米プリンストン大学の研究者らによって、既に解明されている。

「聞いた通りに打ち込む『受動的』な作業に対し、自分の言葉でキーワードを抜き出し、構成して書く行為は『能動的』だからだ」と酒井教授は説明する。

便利さが質問力をそいでいるようだ。

次々に疑問を生み出す行為として何が効果的か。酒井教授は「書く」だけでなく「読む」を挙げ、媒体として本や新聞などの「紙」を重視している。

本や新聞には、インターネットと異なり、映像も音もない。「だからこそ、想像力や思考力を鍛えるのは最高だ」と話す。本や新聞を読みながら、人間の脳は足りない情報を補って、あいまいな点や疑問を整理し、解決しながら自分のものになっているのだ。

質問ができない

問いを立てられない

○知識が不十分

○知識の使い方(技術)が不十分、分からない

○必要性を感じない

「なんとかなる」

……かもしれないけれど

5

2016年12月答申

社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していく過程を、キャリア発達としている。

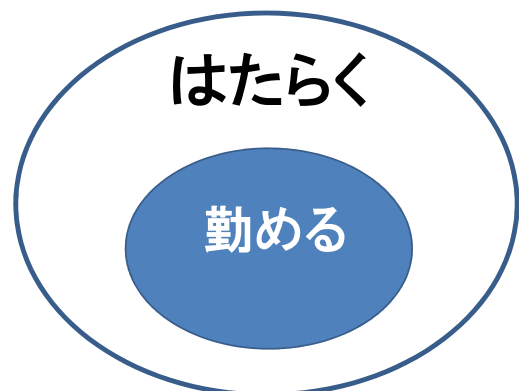
平成23年に中央教育審議会において取りまとめられた答申『今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について』に関する一層の理解と取組の充実が求められる。

キャリア教育：一人一人の社会的・職業的自立に向けて、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育

キャリア：人が、生涯の中で様々な役割を果たす過程で、自らの役割の価値や自分との関係を見いだし、ていく連なりや積み重ね

2011(平成23)年1月中教審答申

「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」



渡辺三枝子筑波大学名誉教授(作図:荒瀬)

【はたらく】 働く

- ①仕事をする。②知能(・精神)が活動する。③他に影響や力をおよぼす。
④一定の活動をする。⑤活躍する。

【つとめる】

勤める 給料をもらって仕事をする。
務める 役割や任務を受け持っている。
努める いっしょうけんめいにする。

職業教育：一定又は特定の職業に従事するために必要な知識、技能、能力や態度を育てる教育

<育成する力>

◆キャリア教育

一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度

◆職業教育

一定又は特定の職業に従事するために必要な知識、技能、能力や態度

(中央教育審議会「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(答申)」(平成23年1月31日))

ライフスタイル

1[lifestyle]人生観・価値観などに基づき、個別に選択する、個人(や集団)の生き方。 *新明解国語辞典*

2[life-style]生活様式。生活習慣。 *現代新国語辞典*

3[lifestyle]生活様式。特に、趣味・交際などを含めた、その人の個性を表すような生き方。

生活様式:生物の生活の仕方。生息場所や行動、栄養の摂取法、繁殖の仕方などを総合的に捉える場合にいう。 *広辞苑*

4[lifestyle]生活の様式・営み方。また、人生観・価値観・習慣などを含めた個人の生き方。

生活様式:ある社会・集団に属する人に共通してみられる生活の型。 *デジタル大辞泉*

2016年12月答申から「3. キャリア教育(進路指導を含む)」

○ 第3章2. (3)においても指摘したように、子供たちに将来、社会や職業で必要となる資質・能力を育むためには、**学校で学ぶことと社会との接続を意識し、一人一人の社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を育み、キャリア発達を促すキャリア教育の視点も重要**である。

○ キャリア教育については、中央教育審議会が平成23年1月にまとめた答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」を踏まえ、その理念が浸透してきている一方で、例えば、

職場体験活動のみをもってキャリア教育を行ったものとしているのではないか、社会への接続を考慮せず、次の学校段階への進学のみを見据えた指導を行っているのではないか、職業を通じて未来の社会を創り上げていくという視点に乏しく、特定の既存組織のこれまでの在り方を前提に指導が行われているのではないか、といった課題も指摘されている。また、将来の夢を描くことばかりに力点が置かれ、「働くこと」の現実や必要な資質・能力の育成につなげていく指導が軽視されていたりするのではないか、といった指摘もある。

進路指導(2016.12中教審答申): 生徒の個人資料、進路情報、啓発的経験及び相談を通じて、

生徒が自ら、将来の進路を選択・計画し、就職又は進学をして、

更にその後の生活によりよく適応し、能力を伸長するように、

教員が組織的・継続的に指導・援助する過程。どのような人間になり、どう生きていくことが望ましいのかといった長期的展望に立った人間形成を目指す教育活動。

学校教育法 第六章 高等学校

第五〇条 高等学校は、中学校における教育の基礎の上に、心身の発達及び進路に応じて、高度な普通教育及び専門教育を施すことを目的とする。

第五一条 高等学校における教育は、前条に規定する目的を実現するため、次に掲げる目標を達成するよう行われるものとする。

一 義務教育として行われる普通教育の成果を更に発展拡充させて、豊かな人間性、創造性及び健やかな身体を養い、**国家及び社会の形成者として必要な資質を養うこと。**

二 **社会において果たさなければならない使命の自覚に基づき、個性に応じて将来の進路を決定させ、一般的な教養を高め、専門的な知識、技術及び技能を習得させること。**

三 **個性の確立に努めるとともに、社会について、広く深い理解と健全な批判力を養い、社会の発展に寄与する態度を養うこと。**

6

中学校学習指導要領(2017年3月)

第1章総則／第4 生徒の発達の支援

1 生徒の発達を支える指導の充実(p.9)

教育課程の編成及び実施に当たっては、次の事項に配慮するものとする。

(1) 学習や生活の基盤として、教師と生徒との信頼関係及び生徒相互のよりよい人間関係を育てるため、日頃から学級経営の充実を図ること。〈略〉

(2) 生徒が、自己の存在感を実感しながら、よりよい人間関係を形成し、有意義で充実した学校生活を送る中で、現在及び将来における自己実現を図っていくことができるよう、生徒理解を深め、学習指導と関連付けながら、生徒指導の充実を図ること。

(3) 生徒が、**学ぶことと自己の将来とのつながりを見通しながら、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を身に付けていくことができるよう、特別活動を要として各教科等の特質に応じて、キャリア教育の充実を図ること。**その中で、**生徒が自らの生き方を考え主体的に進路を選択することができるよう、学校の教育活動全体を通じ、組織的かつ計画的な進路指導を行うこと。**

(4) 生徒が、基礎的・基本的な知識及び技能の習得も含め、学習内容を確実に身に付けることができるよう、生徒や学校の実態に応じ、個別学習やグループ別学習、繰り返し学習、学習内容の習熟の程度に応じた学習、生徒の興味・関心等に応じた課題学習、補充的な学習や発展的な学習などの学習活動を取り入れることや、教師間の協力による指導体制を確保することなど、指導方法や指導体制の工夫改善により、個に応じた指導の充実を図ること。〈略〉

中学校学習指導要領解説 総則篇(2017年7月)

第3章教育課程の編成及び実施

第4節生徒の発達の支援

(3) キャリア教育の充実(第1章第4の1の(3)) p.97

(3) 生徒が、学ぶことと自己の将来とのつながりを見通しながら、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を身に付けていくことができるよう、特別活動を要としつつ各教科等の特質に応じて、キャリア教育の充実を図ること。

〈省略部分・編集箇所あり〉

学校教育においては、キャリア教育の理念が浸透してきている一方で、これまで学校の教育活動全体で行うとされてきた意図が十分に理解されず、指導場面が曖昧にされてしまい、また、狭義の意味での「進路指導」と混同され、「働くこと」の現実や必要な資質・能力の育成につなげていく指導が軽視されていたりするのではないかと、といった指摘もある。

こうした指摘等を踏まえて、キャリア教育を効果的に展開していくためには、特別活動の学級活動を要としながら、総合的な学習の時間や学校行事、道徳科や各教科における学習、個別指導としての教育相談等の機会を生かしつつ、学校の教育活動全体を通じて必要な資質・能力の育成を図っていく取組が重要。

また、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら見通しをもったり、振り返ったりする機会を設けるなど

主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を進めることがキャリア教育の視点からも求められる。

AL 2016年12月答申から

「アクティブ・ラーニング」について

(授業に関する)工夫や改善の意義について十分に理解されないと、例えば、学習活動を子供の自主性のみ委ね、学習成果につながらない「活動あって学びなし」と批判される授業に陥ったり、特定の教育方法にこだわるあまり、指導の型をなぞるだけで意味のある学びにつながらない授業になってしまったりという恐れも指摘されている。

AL(「主体的・対話的で深い学び」の実現)

○「主体的・対話的で深い学び」の実現とは、特定の指導方法のことで、学校教育における教員の意図性を否定することでもない。

人間の生涯にわたって続く「学び」という営みの本質を捉えながら、教員が教えることにしっかりと関わり、子供たちに求められる資質・能力を育むために必要な学びの在り方を絶え間なく考え、授業の工夫・改善を重ねていくこと。

67

AL○「主体的・対話的で深い学び」の具体的な内容については、以下のように整理することができる。

「主体的・対話的で深い学び」の実現とは、以下の視点に立った授業改善を行うことで、学校教育における質の高い学びを実現し、学習内容を深く理解し、資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的(アクティブ)に学び続けるようにすることである。

アクティブ・ラーナーを育てる

68

AL①学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる

「主体的な学び」が実現できているか。

子供自身が興味を持って積極的に取り組むとともに、学習活動を自ら振り返り意味付けたり、身に付いた資質・能力を自覚したり、共有したりすることが重要である。

69

AL②子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること
等を通じ、

自己の考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できているか。

身に付けた知識や技能を定着させるとともに、物事の多面的で深い理解に至るためには、多様な表現を通じて、教職員と子供や、子供同士が対話し、それによって思考を広げ深めていくことが求められる。

70

AL③各教科等で習得した概念や考え方を活用した「見方・考え方」を働かせ、問いを見いだして解決したり、自己の考えを形成し表したり、思いを基に構想、創造したりすることに向かう「深い学び」が実現できているか。

市川伸一氏(東大)〈教えて考えさせる〉

- 深い理解**
- 自分の言葉で学習内容を説明できるか
 - 意味内容に関する質問に答えられるか
 - 類似問題に転移することができるか
 - 振り返って、学んだことや分からないことを、自分の言葉で表現できるか

71

一人一人のキャリア形成と自己実現

<1>特別活動(学級活動)が学校教育全体で行うキャリア教育の要としての役割を担う。

これからの学びや自己の生き方を見通し、これまでの活動を振り返るなど、教育活動全体の取組を自己の将来や社会づくりにつなげていくための役割を果たすことである。この点に留意して学級活動の指導にあたることが重要である。

一人一人のキャリア形成と自己実現
 <2> 将来に向けた自己実現に関わるものであり、一人一人の主体的な意思決定を大切に活動。小学校から高等学校へのつながりを考慮しながら、**中学校段階として適切なものを内容として設定。**キャリア教育は、教育活動全体の中で基礎的・汎用的能力を育むものであることから**職場体験活動などの固定的な活動だけに終わらないようにすることが大切。**

学校の教育活動全体を通じて行うキャリア教育を効果的に進めていくためには、校長のリーダーシップのもと、**校内の組織体制を整備し、学年や学校全体の教師が共通の認識に立って指導計画の作成に当たるなど、それぞれの役割・立場において協力して指導に当たることが重要である。**

考える市民に
 賢い主権者に

7

広島県立 | 高校「授業改善だより」

H29. 1. 1

今年度の授業改善計画の柱は次の4つ**でした。**

- (1) 主体的な学びの推進
- (2) ルーブリックと単元指導計画作成
- (3) 相互観察授業の活性化
- (4) 活用問題の作成

主体的な学びの推進については、**相互観察授業**を見ても、各先生方が、より深く考え、学ぶ意欲を高める授業を目指して**様々な工夫**をしていることが見て取れました。

その成果は、12月の第2回授業評価アンケートの結果には**はっきりと**表れています。各教科においては、現在授業評価アンケートの振り返りが行われていますが、**単なる数値の比較に終わらず**、授業の中身を具体的に取り上げ話し合うことで、相互の研修が深まることが期待されます。

相互観察授業は、今年度は年2回の計画を完全実施することができました。他教科の授業観察を行ったのは**初めての**ことでした。大いに**刺激**になったのではないのでしょうか。相互観察授業の成果と課題も是非教科内で**共有**して、**来年度に向けて**の課題を明らかにしましょう。

ルーブリック・活用問題の作成も現在進行中です。これらの取組は、授業構築の発想の転換を促してくれます。すなわち、**どういう生徒を育てるのか、どういう力をつけたいのかということが、どういう授業をするかよりも先に来る**ということです。どういう力をつけたいのかが明確になると、それは当然シラバスや教科書・副教材の選定にもつながっていくはずで

私たちは、今日の前にいる生徒たちの課題は、その学習が知識の収集・蓄積で終わっていることであると**気づき**、生徒たちが身につけた知識を既習の知識や体験と結びつけて**考えること**によって、より広く、深く考えることができるような力を身につけたいと考えました。それを表しているのが、「IからCへ」という今年度の授業改善のテーマです。

授業改善テーマの「IからCへ」

I、Cは、ICE(アイス)の2つの段階を意味する。ICEとは、カナダで開発・実践されてきた評価モデルで、IはIdeas(アイデア、基礎知識)、CはConnections(つながり)、EはExtensions(応用)を意味する。

『「主体的学び」につなげる評価と学習方法 カナダで実践されるICEモデル』(原著者・Sue Fostaty Young・Robert J. Wilson、監訳・土持ゲーリー法一、訳・小野恵子、東信堂)

「学びにおける段階～アイデア(I)、つながり(C)、応用(E)はそれぞれ、初心者からエキスパートへ、つまり、表面的なものから深い知識へと学びが深まっていく過程をそれぞれ表している」。

アイデア(I)が形になって表れるのは、生徒が重要基本事項、基礎的な事実関係、語彙と定義、詳細、基本的な概念を伝達できる時である。

つながり(C)が作られるのは、生徒が基本概念と概念の間にある関係やつながりについて説明することができる、または生徒が学んだこととすでに知っていることの間にある関係やつながりについて説明できた時である。

応用(E)があるのは、生徒が新たに学んだことを本来の学習の場からは離れたところで新しい形で使う時、または生徒が「それにはどんな意味があるのか?」「自分が世界を見る見方にどう影響があるか?」というような仮説の質問に答えられる時である。

カリマネ通信 NEXTI H28. 4. 5

「主体性を目指し、今大海原を渡れ」

上のタイトルは、昨年度ACTIの小論文制作で、1年7組の〇〇君が書いた小論文のタイトルです。(小論文の一部紹介)

生徒は自ら学ぼうとする力、自ら行動する力を十分持っているのではないのでしょうか。**問題はそれをどのようにわたしたちが引き出していか、どのように大きく育てていくか**であるように思います。

…そのためのカリキュラム開発

カリキュラム・マネジメントについて、まだ十分理解できない部分もあるかと思います。学年会や分掌会、あるいは日々の業務の間に、仲間同士で**疑問をぶつけ合い話し合ってみてください。「学び」というものは、理解してからやるものではありません。やることで理解できるものだ**と思うのです。

○アンケート

！高校生に必要な力

「主体性」についての**認識**

○ワークショップ

等々

8

教育基本法

第五条 国民は、その保護する子に、別に法律で定めるところにより、普通教育を受けさせる義務を負う。

2 義務教育として行われる普通教育は、**各個人の有する能力を伸ばしつつ**社会において自立的に生きる基礎を培い、また、国家及び社会の形成者として必要とされる基本的な資質を養うことを目的として行われるものとする。

<学校教育法>

第三十条 小学校における教育は、前条に規定する目的を実現するために必要な程度において第二十一条各号に掲げる目標を達成するよう行われるものとする。

2 前項の場合においては、生涯にわたり学習する基盤が培われるよう、**基礎的な知識及び技能**を習得させるとともに、**これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力**をはぐくみ、**主体的に学習に取り組む態度**を養うことに、特に意を用いなければならない。

生涯にわたり学習する基盤が培われるよう、

- 基礎的な知識及び技能**
 - これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力**
 - 主体的に学習に取り組む態度**
- 特に意を用いなければならない。

多面的な評価

生徒の変容を見る

○生徒はどのように成長しているか

○生徒自身の振り返りや展望は

「問いかける」「話し合う」「向き合う」
ことから生まれる評価

評価の範囲 次につながる評価

「これってこうだよ」ではなく、「それって
どうなの？」って訊いてくれるから

学校司書の成田康子の「高校図書館から」
(「みすず」7月号)より <折々のことば464>

職場や教室があるいは休息のスペースが、厚い思いやりをもって整えられていると、ひとは、わたしは会社に(あるいは学校に)こんなに大事にされているのだと感ずることができる。

鷲田清一『噛み切れない想い』から

天体写真の中に目的の天体を見つける度に、喜びが溢れた。予想値と近い値が求まると自然と笑みがこぼれた。三日間の研究体験を終えた時のご褒美は、スタッフの皆さんの「良くやったね」という言葉や満天の星空。そして何よりも自分の中に生まれた達成感と喜びだと思ふ。高校生の今だからこそ得られるもの感じられものがあると思ふ。この気持ちはずっと消えないで、いつまでも私の中に残っていくと思ふ。

**評価は対話
やりとりがだいじ**

**居場所と出番が
やりがいを生む
学習意欲が目を覚ます**